

横山ゆずり作 「母と娘」

母 陽子、陽子、遅れますよ。

松本陽子 今行く！

効果音 (階段をバタバタ降りる音)

陽子 わあ、もう7時半。お母さん、お弁当。早く早く！

母 はいはい。あ、陽子、ご飯は？

陽子 要らない。時間ないもん。行ってきまあす！

効果音 (学校のガヤ。始業のチャイム)

陽子 おはよう。

クラスメート A 遅い遅い。陽気、ぎりぎりセーフだよ。

陽子 うん。ゆうべ、宿題がなかなか終わらなくてさあ。

ナレーション 松本陽子は高校2年生。いつものように、にぎやかな朝で彼女の一日は始まります。そして、少々退屈な6時間の授業が終わると――。

効果音 (部屋の戸を開ける。)

陽子 あ、尾崎先輩、こんにちは。

尾崎 あら松本さん、早いよね。最近張り切ってるじゃない。その調子で今度の練習試合も頑張ってるね。

陽子 はい！

ナレーション 陽子は、バスケットボール部のレギュラーでした。多くの高校生がそうであるように、彼女もまた、勉強よりはクラブをやりて学校へ行く、といった毎日でした。

効果音 (部屋の戸を開ける。)

陽子 ただいまー。ああたびれた。

母 お帰り。今日もクラブ？

陽子 そうよ。今週の土曜日に試合があるもんだから、先輩たち厳しくて、選手はつらいのよ。

母 好きでやってるんでしょ。勉強にもそれくらい熱心だといいいのにねえ。

陽子 はいはい。それよりお母さん、今日学校でね、物理の時間に先生ったらね。(FO)

ナレーション 陽子の母は、壱日中家の中の仕事をしながら家族の帰りを待つという、まあ平均的な母親でした。外に働きに出ているというわけではありませんでしたが、いつも小ざっぱりと身づくろいをして、テキパキと家事をする姿は、少々うるさいところを除けば、陽子にとって尊敬できる母親でした。ですから、学校での出来事もよく話しました。でも母に言えない悩みだってあります。そんなとき、だれにも話せない陽子の気持ちを聞いてくれるもの、それは、机の引き出しの一番奥にしまっておいた赤い表紙の日記帳でした。

陽子 「1月26日、日曜日。曇りのち晴れ。今日もクラブの練習で、もうクタクタ。でも土曜日の試合は負けられない。ファイト！ それから、今度の休みの日には、修君と一緒に映画に行く約束をした。そう言えば、もうすぐ修君の誕生日。頑張ってるセーターでも編んであげようかしら。

ナレーション “修君”というのは、この日記にしばしば登場する陽子のボーイフレンドでした。修君との交際が始まった1年前から、陽子はこの日記に一つ一つのことを書き綴ってきたのです。それ

は彼女にとって、だれにも知られたくない大切な秘密でした。

効果音

(学校のガヤ)

A 陽子、ちょっと頼みがあるんだけど。

陽子 なあに？

A うん、あのさあ、今度の日曜日、おれが陽子と一緒に出かけたことにしといてくれない？

陽子 え、一体どうして？

A 実はね、遊びに行くんだ、彼女と。でも、そんなこと言ったらうちのお母親、きっといろいろなさいこと言うに決まってるよ。だから、「陽子と一緒にだ」って言うとけばさ、安心するじゃない。な、陽子頼むよ、話 合わせといて。

陽子 それは別に構わないけど…。でも、いつもそうやってお母さんにウソついて出かけるの？

A だって、仕方ないだろ。陽子だって、まさか修とのこと、親に話したりしないだろ？

陽子 うん、名前は言ってない。でもなんとなく気づいているみたいよ、だれかと付き合っているって。でも、何もうるさく言わないわよ。

A いいな、理解があって。陽子のお母さん、話せるもんな。

陽子 日ごろの行いがいいからよ、きっと。

ナレーション ところが、そんなある日のことです。

陽子 ただいま。

母 (少しオーバーに) まあ陽子、遅いじゃないの。こんな時間まで連絡もしないで。

陽子 えーっと、あの、クラブのあとで友達としゃべってたから。

母 (問い詰めるように) お友達ってどなたなの？ あなたがあんまり遅いんで、お母さん心配で、宏美さんや邦子さん大田区に電話したら、ちゃんと帰ってらしたわよ。一体だれとこんなに暗くなるまで…。

陽子 (さえぎるように) だから「友達だ」って言ってるでしょ！ お母さんには関係ないわ！

母 まあ、親に向かってなんてこと言うの。以前はなんでも、お母さんに話してくれたのに。最近こそそそと隠し事するようになって。

陽子 こそそそとなんてしてないわ。

母 してるじゃないの。あの、修とかいう人のことだって、お母さんには一言も…。(言いかけてやめる。)

陽子 (驚いて) お母さん、お母さん、どうして修君の名前知ってるのよ。どうして?!

母 (慌てて) ど、どうしてでもいいでしょ。

陽子 まさか、まさかあの日記…。お母さん、私の日記見たのね?!

母 知りませんよ、日記なんて。

陽子 ウソ、ウソよ。ほかにどんな方法があるって言うの？ 人の日記を盗み読みするなんて最低だわ！

母 それは…(一瞬ひるむが開き直る) なんですか、その口のきき方は。お母さんはあなたの母親よ。親が自分の子供の日記を見て何が悪いの。

陽子 お母さんのバカ！ 嫌いよ！

ナレーション 陽子は逃げるように自分の部屋に駆け上がりました。

陽子(モノローグ) (エコ) ひどい、ひどいわ。信じてたのに。いくら母親だからって、人の一番大事なものを黙って見るなんて。そんなお母さん、赦^{ゆる}せないわ！(多重エコ)

ナレーション 今までの陽子の、母に対する信頼は音を立てて崩れ落ちていきました。信じていただけに、その母に裏切られたというショックは大きなものでした。もう母と口をきくことはおろか、顔を合わせるのさえイヤでした。学校へ行っても、前のように明るくふるまうことはできませんでした。

尾崎 松本さん、しばらくクラブ休んでるけど、どうしたの？

陽子 尾崎先輩、すみません、黙って休んじゃって。

尾崎 みんなも心配してるわよ、沈んでるみたいだって。何か悩みでもあるんじゃない？ もし私でよかったら話してみない？

ナレーション バスケットボール部の先輩の尾崎さんがクリスチャンだということは、陽子も知っていました。しかし、自分の母親の恥になるようなことを相談するのは、不安でした。

陽子(モノローグ) でも、もしかして、尾崎先輩だったら聞いてくれるかもしれないわ。…先輩、実は母のことなんだけど…。(FO)

ナレーション 黙って聞いていた尾崎さんは、陽子の話が終わると、静かにこう言いました。

尾崎 松本さん、あなたがお母さんを赦せないと思う気持ちは分かるわ。でもね、人のことを責めるばかりで、今のあなたは自分が赦してもらったことを忘れてしまっはいないかしら。

陽子 わたしが赦してもらったこと？

尾崎 そうよ。確かに親だからと言って、子供の日記を勝手に読んでいいってことはないわ。でもそれは、一つの間違いだったのよ。きっと、あなたのこと本当に思っているから、日記を見つけた時、つい開いたんじゃないかしら。あなたのこともっとよく知っておきたいと思って。あなたのお母さんだって人間ですもの、間違いだっただけあるわ。それをいつまでも攻め立てるのはどうかと思うわ。今まであなたが何か失敗した時にも、あなたのお母さんは同じようにしたかしら？

ナレーション 尾崎さんの話を聞いているうちに、陽子は3年前のある出来事を思い出しました。あれは、陽子たちの家が引っ越しの準備で忙しくしていた時でした。

音楽 (ブリッジ)

母 陽子、この箱を階段から下ろすの手伝ってちょうだい。大切なお人形が入ってるから気をつけてね。

陽子 はい。(モノローグ) あら重いのね。よいしょっと。あ！

効果音 (人形の箱が階下に転がり落ちる音)

ナレーション 陽子は見ると見る血の気が引いて行くのが自分でも分かりました。ガラスの破片にまみれて、首の折れてしまったその人形は、空襲の時もそれだけ持って逃げたという、大切な祖母の形見だったのです。

陽子 (泣きそうな声で) あ、わたし…。ごめんなさい。ついうっかり。どうしよう…。お母さん、お母さん、ごめん！

母 …いいのよ。それよりケガしなかった？

音楽 (回想の終わりのブリッジ)

陽子(モノローグ) そうだわ。あの時も、いいえ、いつだって、お母さんはわたしの失敗を赦してくれたわ。

尾崎 ねえ、松本さん。わたしたちは皆、心の中に自分中心の罪を持っているの。もちろんわたしも、そしてあなたも、あなたのお母さんもよ。罪を持ったままでは、人は天国に入ることができないの。それで神様は、一人子イエスを遣わしてくださったの。なんの罪もない神のみ

子イエス様が、十字架にかかって死んでくださったことによって、わたしたちの罪は赦されたのよ。そして聖書はね、「そのようなすばらしい赦しを得たわたしたちは、お互いの負い目を赦し合うように」と言ってるの。

ナレーション

その日、陽子が家に帰ると――。

母

陽子、この間のこと、やっぱりお母さんが悪かったわ。ごめんなさいね。

陽子

(少し驚きながら)お母さん…。いいのよ、いいの、もう。それよりね、お母さん。いつか修君、家に連れてきていい？

母

え？ もちろんよ。

ナレーション

陽子はニッコリ笑うと、階段を駆け上がりました。その手には、尾崎先輩から借りてきた聖書が握られていました――。

<完>